

候文の文範について 土屋 博

土屋 博

「名家手簡 候文範 上下巻」佐藤寛著

(庚寅新誌社、明治廿五年九月三版、定價金五拾錢)

東京古書會館の下町展にて古書價格千圓也。初版は明治廿五年七月、版を重ねたるは當時需要のありたる證據か。

今日に於いても、候文を書かんとする者にとりては、本書は格好の基礎的教材なりと覺ゆ。ただし、本文及び簡潔なる作者紹介文あるのみにて、解説・註釋は特段無ければ、自修するの外無し。

本書編纂の経緯、凡例によらば、以下の如し。著者の好事のすさびによりて、名家の手簡は勿論のこと、興味深き候文を見る毎に寫し置きつるもの、いつとなく積もりて一部の冊子を成すに至りたる由。これをば慶應義塾々長小幡篤次郎に見せたるどころ、「こは候文の軌範と爲すには、げに好き書なり、いかで出版したまはずや」との反應あり、さらばとて、かく公にするやうにはなりぬとぞ。

収録せられたる候文の文例は百人百章に及び、徳川家康に始まりて、徳川慶喜に終はる。名將、賢佐、和漢學者、詩歌連俳等を含む。

以下、幾つかを例示せむ。

徳川家康「台徳院たいの御臺所に贈る書」より

『一筆申入候、先は日増に暖氣に成候て、暮しよく候。』

(註) 台徳院は、徳川秀忠の法號。

大石良雄「落合與左衛門に與ふる書」より

『一筆致啓上候、瑤泉院えうぜん様倍御機嫌能可被成御座と奉恐悅候。』

(註) 瑤泉院は、赤穂藩主淺野長矩(内匠頭)の正室。落合は瑤泉院の家臣。

新井白石「室鳩巢火災にかゝりしを見舞ふ書」より

『昨日之御報拜誦、驚愕不及是非候、雖然火急之處に御全家無御異事を、此上の多幸と可被思食候。』

頼山陽「筑山つしま奉盈先生へいに上る書」より

『任幸便一筆奉申上候、殘暑之節、益御勇健被遊御座候哉、承知仕度奉存候。』

(註) 幸便に任せ〓人に持參させる手紙。

高野長英「茂木茂恭に與ふる書」より

『客歲仲春念幾日之朶雲たぐも礎いしに相達、拜見仕候』

(註) 念〓廿の代用字。朶雲〓お手紙。

吉田松陰「妹に與ふる書」より

『此間は御文下され、觀音様の御せん米、三日の精進にいたただき候様との御事、御深切の御こゝろ

ざし感入申候。』

井伊直弼「西村義行に與ふる書」より

『此頃は最五月雨の降續き、閑窓に物寂敷暮し申候。』

佐久間象山「姊に與ふる書」より

『はからず北澤上京にて五日つけの御ふみ、ありが度拜見申上候。』

徳川慶喜「母堂信義院に上る書」より

『朝夕冷氣に相成候處、先以益御機嫌能被爲渡、恐悅至極に奉存候。』

(令和元年五月七日受附)